

取材体験で得た自信

—— 初年次セミナー「フードフェスタ」レポート ——

A Seminar Report: Students' Confidences Gained after Interviewing Visitors at the Food Festival in Hiroshima

村上哲夫・石田信夫
Tetsuo MURAKAMI and Nobuo ISHIDA

The Students made an attempt to gather informations by interviewing the visitors at the Food Festival in Hiroshima. It is part of the curriculum to gain “practical power” on the seat. The students who were backward before boud turned to be quite positive on the scene and submitted all of them their reports. It turned out to be a good chance for students to recognize ther own potentialities

〈要旨〉マスコミュニケーション学科の初年次セミナーで「ひろしまフードフェスティバル」の会場での取材を試みた。見知らぬ人とコミュニケーションをとり、臨機応変に事に処する力、いわば現場力をつけるカリキュラムの一環である。最初は腰が引けていた学生も、一転やる気モードになり、全員が課題を提出した。「やればできる」ことに学生自身が気付く機会になった。

1 現場力をつけたい

マスコミュニケーション学科のキーワードの一つに「現場力」を掲げている。

思わぬ事態に遭遇してもうろたえない。分からなければ人に声を掛ける。落ち着いて観察する。雰囲気を読んで動く…。

こうした力が備わっていれば、社会に出てもそう恐れることはない。その力をつけるプログラムを初年次セミナーに組み込みたいというのが、今回の狙いだった。

初年次セミナーではこれまで「下蒲刈島の松涛園見学と塩作り体験」「呉市立美術館と大和ミュージアム見学」「テーマを決めての宮島探索」「平和公園の碑巡り」などの学外演習を採り入れていた。

しかしグループでの行動であり、現地で誰かと1対1で接する体験にはなっていない。そこをもう一歩、踏み込ませてみたかった。その場として選んだのが「フードフェスタ」である。

2005年から広島城や中央公園の一带を会場として始まり、2日で40万人を集めるという大イベントだ。そこで「取材」は貴重な経験になるに違いない。

では具体的には、どんな課題にするか。テーマ自体は食べ物なので、そう難しくはない。次のように決めた。

自分の一押しの食べ物を探し、それを雑誌あるいはチラシ風（A4用紙1, 2枚）にまとめる。
パワーポイントでのプレゼンもをする

多くのブースがある中で、これはというものを探し出し、お金を払って試食する。写真も撮る。
店側からその食べ物について、材料や味の工夫などを聞く。味について客観性を持たせるために、別の客の感想も聞く。

一という取材が必要となる。

学生にとっては、かなりきついはずだ。込み合うお昼時間。客はゆっくり食べたいし、店も客の対応に忙しい。ちょっと話を聞かせてほしい、と頼んでも、迷惑そうな顔をする人も多かろう。

それを重々承知の上だから、多くのことは求めない。

とにかく勇気を出して声を掛け、少しでも話を聞き、それなりのレポートになっていればそれでいい、というのが教員の思いだった。

2 学内で予行演習

準備には慎重を期した。いきなりその場に放り込んで「話を聞いて来い」というわけにはいかない。下手をすると、逆効果になってしまう。

まず学生に、趣旨を説明するところから始めた。

学生が「なぜこんなことをするんだろう。取材記者になるわけでもなし」と抵抗感を抱いたら、前向きになれない。そこで最初に「これは知らない人に声を掛ける訓練だ」と宣言した。声を掛けること、尋ねること、用件を伝えることは、コミュニケーションの基礎であり、社会性を育てる第一歩である。ひいては就活にも役立つ一とまで強調した。

そのうえで、学内で取材の「予行演習」を試みた。

いきなり大人に声を掛ける前に、とりあえず学生相手にやってみよう、ということである。課題はこうした。

マスコミュニケーション学科のイメージを他学科の2人に聞き、写真とともにA4用紙にまとめる。それを発表する

取材の手順として事前に注意したのは、

- ①自分の学科と名前を名乗って、趣旨を説明する
- ②相手の名前を尋ね、あらかじめ撮影の許可を得る
- ③写真は他目的には使わないことを伝える

一の3点である。

学生にとっては、ほとんど初めてのことだろう。全員やりきれるか、やや不安もあった。しかし結論から言えば、思った以上にできていた。

提出されたレポートを見ると、ちゃんと学科、氏名を聞き、顔写真も撮っている。学科に対するイメージも、幅広く聞き取っていた。参考までに言えば、プラスイメージは「明るく、社交的」「団結心が高い」「パソコンに強そう」など、マイナスは「チャライ」「オタクが多そう」など。そう見られていたか、と教員の参考にもなった（学科のブログに概略を掲載）。

インタビューは、食堂など学内の公共スペースで。写真撮影は断られるケースもあったが、その時は新たに、撮らせてくれる人を探したようだ。この経験を踏まえて、いよいよ本番である。

3 雑踏の中へ

本番の前には、あらためて次のように取材すべき要素を伝え、注意事項を念押しした。

〈取材する要素〉

- ①一押しの食べ物とその写真
- ②提供する側のコメント（開発の工夫、材料、ウリの部分…）
- ③客2人の感想と住所（広島市なら区まで）氏名、年齢と写真

〈注意事項〉

- ①自分の学科と名前を名乗って、趣旨を説明する
- ②相手の名前を尋ね、あらかじめ撮影の許可を得る
- ③写真は他目的には使わないことを伝える

また、実際に取材する場面をイメージさせ、どういう風に声をかけたらいいか考えさせた。その後で、教員が客になってロールプレイもしてみた。

取材の助けになる小道具として「比治山大学」の腕章も用意することにした。腕章があればとりあえず、怪しい者ではない、と思わせる効果がある。

当日は別記のようなスケジュールである。秋日和ではあったが、学生にとっては、かなり厳しい3時間になった。

何しろ人がすさまじかった。フェスタ事務局によれば、初日は40万人が繰り出したという。われわれも、学生の出欠チェックをした後で、表御門を抜けて護国神社前の広場に出ようと思ったが、人の壁にふさがれて、なかなか前に進めない。押しのけて行くしかない。

腕章をつけた学生を探すが、これではどこに紛れ込んだか、さっぱりわからない。ともかく開場を一回りしようと、広場から、中央公園の方に向かうが、ここも相当の込み具合である。

たまたますれ違った男子学生連れは「こんなに人が多いんじゃない、話を聞くのは無理っすよ」とあきらめたような声を掛けてくる。

非常連絡用の携帯には「どうしても2人の話を聞けなきゃいけないんですか」と泣き言が届く。

プロの記者でも、こうした場ではそう簡単に声かけができるわけではない。難渋しているのではないが、1年生には少し荷が重すぎたか、といささか心配になる。

しかし、杞憂だった。

集合時間の30分ぐらい前から、取材を終えた学生がぼつぼつ集まり始め、話を聞くと、どの学生もちゃん

11：30 アストラム県庁前駅付近に集合。腕章を受け取り、ばらばらに会場へ
(この間、自由に取材)

14：30 表御門に集合。腕章返却

15：00 解散

学生33人、教員4人



会場の入り口



お昼時間の人込み



メモを取りながら、感想を聞く

とできている。先だつての男子学生も「やりましたよ」と元気なものだ。中には「二度としたくない」という女子もいたが、一人の落後者も出なかった。

4 「案外できた」

学生たちが提出したレポートを評価してみる。そのうえで、今回の課題がどう受け止められているかを、アンケート結果などから探してみたい。

レポートはよくできていた。別表に示したように、食べ物の味や材料を紹介し、写真を撮り、自身の感想を入れるまでは、ほぼ全員がクリアしている。店側のコメントも、33人中19人が聞いていた。時間帯が時間帯だけに、半分以上は聞けなくて当たり前と思っていただけに、予想以上の頑張りである。

客の感想も、全員が聞いていた。住所（市・区まで）が不完全だったり、フルネームになっていなかったりしたものはあるが、それは想定内である。

レポートを見ると、レイアウトのきれいさも合わせてタウン誌の1ページにもなりそうな出来栄のものもある。事前に用意していたダミーが恥ずかしくなるぐらいの完成度だった。

〈取材レポートの完成度〉

A=食べ物の紹介
D=店側のコメント
G=客2のコメント

B=自身のコメント
E=客1のコメント
H=住所と氏名

C=写真
F=住所と氏名
I=客の写真


食べ物	A	B	C	D	E	F	G	H	I
尾道ラーメン	○	○	○	○	○	○	○	○	○
坦々麺	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ジャージャー麺	○	○	○	○	○	○	○	○	○
焼きカキ	○	○	○	○	○	△	○	△	○
淡路揚げ	○	○	○	○	○	○	○	○	○
じゃがモチフランク	○	○	○	×	○	△	○	△	○
巨大豚串	○	○	○	○	○	△	○	△	○
ユニカルボナーラ	○	○	○	○	○	○	○	○	○
広島ラーメン	○	○	○	○	○	○	○	○	○
カキボン	○	○	○	△	○	○	○	○	○
イタリア風鉄板焼き	○	○	○	○	○	◎	○	◎	○
おコンのみ焼き	○	○	○	○	○	△	○	△	○
ちくわとジャコ天	○	○	△	×	○	△	○	△	○
ピリ辛肉巻きドック	○	○	○	×	○	×	○	×	×
パニーニ	○	○	○	○	○	◎	○	◎	○
もちもちポテト	○	×	○	×	○	×	○	×	○
太っちょ焼きそば	○	○	○	○	○	○	○	○	○
肉の串焼き	○	○	○	×	○	○	○	○	○
豚井	○	○	○	×	△	◎	△	◎	○
肉の串焼き	○	○	○	×	△	○	△	○	○
アイスクリーム	○	○	○	×	○	○	○	○	○
広島ラーメン	○	○	○	△	○	○	○	○	○
キムチチャーハン	○	○	○	△	○	○	○	○	○

尾道ラーメン	○	○	○	×	○	○	○	○	○
カキボン	○	○	○	△	○	○	○	○	○
トッポギ・チヂミ	○	○	○	×	○	○	○	○	○
ホルモン焼きうどん	○	○	○	×	○	○	○	○	○
ヘルシーハンバーグ	○	○	○	×	○	×	○	×	○
トマトチーズパスタ	○	○	○	×	○	△	○	△	○
米粉空揚げ	○	×	○	○	○	×	○	×	○
すうぶ空揚げ	○	○	○	○	○	△	○	△	○
トッポギ	○	○	○	×	○	△	○	△	○
ニジマス釣り堀	○	○	○	△	○	○	○	○	○

(◎は年齢までそろっているもの)



レポートは、見出しもそれぞれ考えてつけている




広島風鉄板ピザ
イタリア料理と鉄板焼きの融合

広島風鉄板ピザを出発させていた、Griddle Kitchen Ma(グリッドキッチンメイ)の店主である鈴木寛孝氏にインタビューを行った。

お店の方にインタビュー

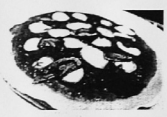
広島県に産されている生地をピザを焼いたもの、ベースになっている生地は、広島県産に使用されているものがある。特徴はなんといっても、それぞれ焼き加減が異なるのが特徴。1枚1枚異なることになっている。そのほかはトマトソース、モzzarellaチーズ、青唐辛子をのせて、そしてソーダソースは鹽と糖とで簡単に作ることができる。マルゲリータの他にも、音戸もみり入り広島風などの種類がある。350円。

広島風鉄板ピザとは？




ムネ、ファンチ、イタリアンが融合して、1枚1枚異なるのが特徴。焼き加減は、店では決まっておらず、お客さんで決める。そのほかには、広島県産の食材を使用している。マルゲリータ、音戸もみり、音戸もみり入りなど、さまざまな種類がある。350円。

こだわりの3枚生地



鉄板ピザ マルゲリータ



お客さんにインタビュー

パワーポイントでもプレゼン

では、学生自身はどう感じているか。まず無記名のアンケート（有効回答26）からみてみる。

〈インタビューについてのアンケート〉

学内でのインタビュー

◆声を掛ける前

- ①自信がなくかなりためらった 6 + ②ややためらいがあった 16 =22 (不安)
 ③ためらいはなかった 3 + ④むしろ面白そうと思った 1 =4 (自信)

◆実際のインタビューは

- ①腰が引けて全くだめだった 1 + ②あまりうまく聞けなかった 13 =14 (できた)
 ③まずまず聞けた 10 + ④自然に声が掛けられ、いろいろ聞けた 2 =12 (できない)

◆振り返って

- ①難しいと思い、やっぱり難しかった 14
 ②難しいと思ったが、案外そうでもなかった 6
 ③易しいと思ったが、案外難しかった 4
 ④易しいと思い、やっぱり易しかった 2

フードフェスタ会場でのインタビュー

◆声を掛ける前

- ①自信がなくかなりためらった 8 + ②ややためらいがあった 11 =19 (不安)
 ③ためらいはなかった 4 + ④むしろ面白そうと思った 3 =7 (自信)

◆実際のインタビューは

- ①腰が引けて全くだめだった 4 + ②あまりうまく聞けなかった 10 =14 (できた)
 ③まずまず聞けた 10 + ④自然に声が掛けられ、いろいろ聞けた 2 =12 (できない)

◆振り返って

- ①難しいと思い、やっぱり難しかった 11
 ②難しいと思ったが、案外そうでもなかった 9
 ③易しいと思ったが、案外難しかった 4
 ④易しいと思い、やっぱり易しかった 2

2つのインタビューを通して

◆見知らぬ人に声をかけることに対し

- ①まだ自信がない 9
 ②どちらかという自信がない 10
 ③どちらかという自信がついた 6
 ④かなり自信がついた 1

◆新1年生にも2つの課題をやらせた方がいい？

- ①やらせる 17
 ②やらせない 9

総じて言えば、インタビューをする前は、「自信」派より「不安」派が多かったが、やってみた結果は「できた」派が「できない」派より多かった—と言えようか。

知らない人への声かけについては、自信がついたのが7人に対し、まだまだと答えたのが19人だった。ただ後輩にもやらせるか、という問いに対しては「やらせる」方が多数になる。「教育効果」を感じているのだろうか。

次に自由意見を、否定的ー肯定的の順に並べてみる。

- * いい体験と思いますが、この課題が何の役に立つのかなあと疑問に感じます。記者を目指している人にしてみれば、とても役に立つと思いますが、違う分野に興味がある人にとってはあまり意味が見出せないのではないかと。
- * 1年生にとってはまだ早い
- * 心が折れて、またしたいとは思わなかった。
- * 心構えはできるが、もうしたくない。取材が終わった時のほっとした感じは忘れられない。
- * 人ごみはしんどかったです。
- * 思った以上の人がいたので、もう少し時間を長めにしてほしい。お店の人が忙しそうでなかなか話を聞くことができなかったのが残念だった。
- * 写真は5回中4回断られた。この苦い経験もいい勉強になったが、もう少し練習したい。具体的に何を聞けばいいか考える機会がほしい
- * 声をかけるのにためらいはなかったが、話をふくらませていくのが難しかった。やってみて取材がどのようなものか分かったので、やってみてよかったと思う。
- * 知らない人たちばかりなので心配でしたが、やってみると断られる時もあったが、優しくしてくださったので、楽しかったし、学内の時よりももっといろいろと聞けた。
- * さすがに緊張した。知らない人に話しかけるのはあまりない経験だし、将来役に立つかもしれないからよいことと思う。知り合いにやると、ただのおしゃべりになるから無意味になると思う。
- * 働いている人にインタビューするのはとても大変だと思いました。多くの人だったのですぐに終わるかと思いましたが、断られたりもしたので、少し辛かったです。でもいろいろ経験できてよかったと思います。

5 肯定的な受け止め

次に、初年次セミナーの最後に書かせた振り返りシート（記名、有効回答45）をまとめてみる。所期の狙いである「現場力」が身についたかと思うか、との問いに対して、肯定的に受け止めたのが23人と、否定的な2人（不明1）をはるかに上回った。

インタビューに最初はしり込みしていたが、意を決してやってみると、案外できた。自分にもできるんだ、という自信を得た。そんな学生像が、あらためて浮かび上がる。

直後のアンケートから少し時間が経ってからの総括であり、内容も、やや奥行きを増している。幾つかの声を紹介する。

- * 人混みがとても苦手な私は、その苦しさの中で場の空気を読んだりする力が少しはついたのではないと思う。その実感はまだないが、勇気を持って知らない人に話しかけたので、これからも役に立つことだと思えた（女）
- * 本当に全く初めてのことで緊張しまくりでしたが、割と慣れたように思います。これからこういう授業があってもこの経験を生かして何とかなるなと思います（女）
- * 現場力は身についたと思います。他人は結構嫌いな方だし、最初はとてもやりたくなかったけれど、もう1回やっても平気なくらい自信が付きました（女）
- * どんなことを話してどういうことを聞けばいいか、少し分かった。話しかけたからには場を盛り上げるにはどうしたらいいか、考えるようになった。ほんの少しだけ、知らない人に話すことに

対し、免疫がついた（女）

- *知らない人にインタビューするのは初めての経験で、うまくはいかなかったけれど、無駄ではないし、学ぶことができたと思う（女）
- *このタイミングで声を掛けたらまず応じてくれないだろうという察知力が身につきました。最初はできないよ、と思っていましたが、やってみるとあまり苦にはなりません（男）
- *知らない人に話しかけるのは苦手で、学内のインタビューはつらかったが、フードフェスタではスムーズだった。そういった意味でのコミュニケーション能力は、この授業で高まったと思う（男）
- *普段の授業では絶対できないことなので、よい経験になった。インタビューは社会的な訓練にはぴったりと感じた（男）

もう一つの質問が「来年1年生が同じ初年次セミナーを受講するとすればどんなアドバイスをするか」である。修羅場の体験からどんなコツをつかんでくれたか、確かめたかった。

- *勢いが大事。ちゅうちょしない。笑顔で話しかける。グループが話しかけやすい。早めに行動、決断する（女）
- *団体で行動しない方が、追い込まれて結果、早く終わる。聞くことはメモする。写真撮影は第一に言う（女）
- *リラックスしてインタビューすれば大丈夫。でも事前に何を聞くかの準備は大切（女）
- *雰囲気は圧倒されない。とりあえず話しかけ、断られたらすぐに退く。話しかけやすそうな人を見つける（男）
- *緊張して何を話しているのか分からない状態になっては、ほとんどの人は話を聞いてくれません。自分に自信を持ってインタビューしてみてください（男）
- *迷いや戸惑いは、時間だけを奪う。まずは行動（男）
- *断られるのが当たり前だからいちいちよくよする必要なし。自分だけじゃないって思うと乗り切れるはず（女）

先輩としての「かっこつけ」を多少割り引くにしても、なかなかたくましい。最後に、まるでわれわれの意図をくみ取ってくれたかのようなメッセージを掲げる。

- *見知らぬ人にインタビューする現場力というのは、新1年生にも味わってほしい。絶対勉強になるし、何か学んで身につくものがあると思うからだ。発表する機会は、私たちより増やしてほしい。緊張してドキドキするけど、就職したらそんなの当たり前。1年の間にその機会をたくさん作って学んだ方が絶対よいと思います（女）

6 次回に向けて

現場力をつけ、自信を持たせる—という方向性は間違っていなかったと思われる。次回に向けての課題を挙げたい。

まず狙いの徹底である。

アンケートに「こんなことをして何になる？」という疑問が散見された。今の学生には、役に立つことが目に見えるようなものでないと食いつかない、という傾向がある。それに流されるのもどうか

と思うが、もっとはっきり「就活に役立つ」「社会に出て役立つ」と明示する必要があるかもしれない。時間の設定も再考の余地がある。

ちょうどお昼の繁忙時間と重なり、出展者側のコメントを取るのには厳しい。11時半ごろまでに「この一品」を選べるぐらいにスタートを前倒しすることも考えたい。

それから、どうしても拒否感のある学生にどう対応するか。今回、厳しい感想を書いた学生にもう一度聞き取りをして、どうすれば抵抗感が薄れるかを検討してみたい。

追記

本文は2012年入学の1年生を対象にしたレポートだが、原稿締め切り後に2013年度生のアンケート結果（回答45人）がまとまった。比較のために追記する。

始める前は自信がなかったが、やってみると案外うまくいったと感じる学生が多いのは、前年と同じ。2回の経験を通じて声掛けに自信を持ったと、6割の学生が答えている。次の1年生にもやらせたいかとの問いにも、全員がイエスと回答している。

あらためて、インタビュー体験は有効な教育実践であるとの実感を深めることができた。

〈インタビューについてのアンケート＝2013年度生〉

学内でのインタビュー

◆声を掛ける前

- ①自信がなくなりました 13 + ②ややためらいがあった 21 =34 (不安)
 ③ためらいはなかった 9 + ④むしろ面白そうと思った 2 =11 (自信)

◆実際のインタビューは

- ①腰が引けて全くだめだった 1 + ②あまりうまく聞けなかった 25 =26 (できた)
 ③まずまず聞いた 11 + ④自然に声が掛けられ、いろいろ聞いた 8 =19 (できない)

◆振り返って

- ①難しいと思い、やっぱり難しかった 21
 ②難しいと思ったが、案外そうでもなかった 12
 ③易しいと思ったが、案外難しかった 8
 ④易しいと思い、やっぱり易しかった 3

フードフェスタ会場でのインタビュー

◆声を掛ける前

- ①自信がなくなりました 6 + ②ややためらいがあった 25 =31 (不安)
 ③ためらいはなかった 9 + ④むしろ面白そうと思った 5 =14 (自信)

◆実際のインタビューは

- ①腰が引けて全くだめだった 1 + ②あまりうまく聞けなかった 12 =13 (できた)
 ③まずまず聞いた 22 + ④自然に声が掛けられ、いろいろ聞いた 10 =32 (できない)

◆振り返って

- ①難しいと思い、やっぱり難しかった 15
 ②難しいと思ったが、案外そうでもなかった 20
 ③易しいと思ったが、案外難しかった 8
 ④易しいと思い、やっぱり易しかった 2

2つのインタビューを通して

◆見知らぬ人に声をかけることに対し

①まだ自信がない	8
②どちらかという自信がない	10
③どちらかという自信がついた	21
④かなり自信がついた	6
◆新1年生にも2つの課題をやらせた方がいい？	
①やらせる	44
②やらせない	0

*一部未記入があり合計が45にならない

〈キーワード〉

取材体験 インタビュー 写真撮影 初年次セミナー 現場力

村上 哲夫 (マスコミュニケーション学科)

石田 信夫 (マスコミュニケーション学科)

(2013. 11. 1 受理)